

山田
初枝

白 桃

句集



文學の森



句集
白^{はく}
桃^{とう}

発行 平成二十七年九月二十八日

著者 山田初枝

発行者 大山基利

発行所 株式会社 文學の森

〒一六九・〇〇七五

東京都新宿区高田馬場二・一・二 田島ビル八階

tel 03-5292-9188 fax 03-5292-9199

e-mail mori@bungak.com

ホームページ <http://www.bungak.com>

印刷・製本 竹田 登

©Hatsue Yamada 2015, Printed in Japan

ISBN978-4-86438-446-9 C0092

落丁・乱丁本はお取替えいたしません。

句集 白桃／目次

序 田島和生 1

瓜 苗 平成元年～十年 13

新 茶 平成十一年～十五年 53

寒牡丹 平成十六年～二十年 85

立浪草 平成二十一年～二十三年 131

玉 虫 平成二十四年～二十六年 171

あとがき 198

序

山田初枝さんは、実に句作に熱心である。仲間も感心している。

私は、東京の俳句文学館で開かれる関東句会に、自宅の天津からほぼ一か月おきに出席している。山田さんよりはるばる静岡から新幹線で来られるが、午後の句会が始まるまで、上野公園などに足を延ばし、句を作られる。本句集は、まさに足を使つて紡いだ二十五年余の句業の結実といつていい。

初枝さんは浜松生まれの浜松育ち。現在は静岡にお住まいである。俳句は平成元年、五十一歳のとき、沢木欣一主宰「風」の仲間に誘われて始め、すぐ入会される。浜松句会の稲葉光堂氏らの指導で、「風」の即物具象と写生の基本を守り、句作に没頭される。俳句の骨法をたちまち会得され、翌年、「風」誌に早くも四句入選し、仲間を驚かせた。

鶏頭の髻にもぐりし蛙かな
鳥の糞中より鶉の二葉出づ
木蓮の一ひらほつれ風に鳴り
蜥蜴の腹虫狙ふとき脈打てり
青虫の音立てて噛む樟若葉

本句集の冒頭を飾る五句である。どれも五感をよく働かせ、写實的に表現した作品で、初心者とはとても思えない。

一句目の「鶏頭」は、真つ赤な鶏頭の花の隙間にもぐりこんだ蛙に焦点を当てて詠む。蛙は目の奥まで赤く燃えるようである。二句目、「鳥の糞」の鋭い把握は周囲を感嘆させる。三句目、「木蓮の一ひらほつれ」の表現の鮮やかさ。四句目、「蜥蜴の腹」の「脈打てり」。そして、五句目、「青虫」の「音立てて噛む」。どれも、ものに即して丁寧に描写し、大胆に詠み上げている。

初枝さんは幼い頃、農業を営む祖父母の傍らで育ち、蝶々や蟻、蜘蛛、蛙、雀、鴉などの小動物とよく遊んだという。夫は大学農学部に勤務され、その

関係で、自然の豊かさに触れる暮らしだった。俳句もおのずから小さな命に心を通わせ、人の嫌がる毛虫ですら、愛おしさを感じさせる句に仕立てている。

平安期の短編集『堤中納言物語』に、「虫めづる姫君」が登場する。「虫めづる」点は同じだが、初枝俳句はその虫の命を捉えて詠んでいる。「虫めづる」句の世界を覗いてみたい。

剪定の枝に天牛噛みしあと

芋虫のくるまりゐたる夏落葉

足早に毛虫の歩く残暑かな

まんさくの花にからまる蜂の脚

背に乗つてすぐ別れけり水馬

選り始めると、切りがない位に多い。しかも、どれも面白い。吟行では、図鑑と大きな虫眼鏡が常備品だそうだが、作品はその苦勞の結実といつていいだろう。

一句目、「剪定の枝に天牛^{かみきり}」が噛んだ跡を発見するとは、驚きである。二

句目、芋虫がねぐらのようにくるまる夏落葉。三句目、残暑を足早に歩く毛虫。四句目、まんさくの花の藁に脚を取られてもがく蜂。五句目、雄が雌の背中に乗り、交尾をするかと思いきや、ぱつと別れた水馬。それぞれ大変ユニモラスである。

こうした傑作は、蛙や蛇などを詠んだ句にも多い。

雨蛙 焚火の灰にまみれぬし

産み終へて森青蛙目をつむる

蜥蜴の子日向に出て舌出せり

一句目、そろそろ冬眠を始めた蛙かも知れない。まだ温みを残す焚火に少しめしめと潜り込んだのはよいが、灰を掻き出されてしまった。二句目、産卵を終えた森青蛙は疲れたのか、満足したのか、じつと目をつむっている。最後の句は、小さな蜥蜴の子が寒いのか、日向に出てチロチロ舌を出している。まるで童画の世界である。

鳥を詠んだ句では。

鴨が落葉を踏みて迂りけり
田の水割つて水飲む鴨かな
草引きし穴に雀の土浴ぶる
牡丹の前に砂浴ぶ雀かな

一句目、乾いた落葉を踏んで迂った鴨。二句目、鴨は喉が渴き、田に張った水を嘴で割つて水を飲む。あとの二句は雀が砂浴びをしている光景を詠んでいる。「草引きし穴」は、炎天下で草取りをした自分と、その草を抜いた穴で砂浴びをする雀と心が通う。「牡丹の前に砂浴ぶ雀」とは、牡丹を眺めながら、少し贅沢な雀の砂浴びである。どの句もカメラのシャッターを切るように、鳥の瞬間の姿を鮮やかに捉える。

句集の後半には、父母や夫を詠んだ作品が見られるが、介護や最期をみとった内容が多く、胸が打たれる。

アネモネや父の退院間近なる
退院の父青芝を踏みしむる
病む母の粥煮てをれば初音かな

もう死ぬと言ひて葛湯を啜りけり

竹の花母屋に一人母住まふ

母逝きて家がらんどや返る

最初の二句は病後の父を詠む。一句目の「アネモネ」は色鮮やかな花に父の退院の喜びが重なる。四句目の「もう死ぬと言ひて葛湯を啜りけり」は、老いた母の哀れさが切々と胸に迫る。五句目、竹の花が囲む母屋に一人住む母。最後の句は、母が亡くなり、寒々とした母屋の様子を「がらんど」という表現で鮮やかに描いた。

特に、哀切な思いで詠まれるのは、夫の逝去であろうか。平成二十二年には八句が並ぶ。

白れんに風の強まり夫逝けり

春の地震夫のなきがら揺らしけり

納棺の夫に化粧や雪柳

夫逝きて春荒れの日の続きをり

喪ごころや岩に坐りて落花浴ぶ

新墓の夫の名に沁む春の雨
喪に籠り春満月に照らさるる
喪の庭に立浪草の白ばかり

この中で、特に五句目の〈喪ごころや岩に坐りて落花浴ぶ〉は絶唱といつていい。放心状態の一人の女性が冷たい岩に坐り、はらはら散る桜の花を浴びている姿が浮かび、胸に迫る名品といつていい。

いま、悲しみから少し立ち上がった初枝俳句の世界は、大きな広がりを見せている。持ち前の諧謔味にも深みを交え、味わい深い。

大仏の福耳に來て囀れり
寒禽の糞より樟の匂ひけり
桜散る上野の山を僧一人
熊ん蜂飛ぶ漱石の猫の墓
黒揚羽土俵の塩を舐めるたり

一句目、「大仏の福耳」と、春の小鳥たちの「囀り」という取り合わせの

妙。二句目、「寒禽」は、寒中の小鳥の糞から匂うのは、樟の実の芳香とは傑作である。三句目、「桜散る」は、広い上野の山を、のんびりと桜の花を浴びながらゆく一人の僧。四句目は、漱石の小説『吾輩は猫である』の猫の墓に飛びかかる大きな熊ん蜂。五句目は、土俵に撒かれた塩を舐めるのは黒揚羽。何と楽しい作品だろうか。

初枝さんは、あまりものをおつしやらない方だが、言いたいことは全部、作品の中に盛り込まれているようである。どうか、これからもお元気に上野の山なども歩かれ、楽しい俳句を披露して下さい。

平成二十七年七月一日

田島和生

句集 白桃／目次

序 田島和生 1

瓜 苗 平成元年～十年 13

新 茶 平成十一年～十五年 53

寒牡丹 平成十六年～二十年 85

立浪草 平成二十一年～二十三年 131

玉 虫 平成二十四年～二十六年 171

あとがき 198

装丁
クリエイティブ・コンセプト

句集
白
桃

瓜 苗

平成
元年
～
十年